

幼いころ、新潟の弥彦にいた事がある。弥彦山の麓だ。その時の遊び仲間の母親が弥彦山の登山道で茶屋を商っていて、時々荷物運びを手伝わされた事があった。一仕事の後、駄賃の菓子をもらうとそのまま山頂まで走るように登って、友達と2人で眼下の広大な日本海を時間の経つのも忘れて眺めたものだ。遥か西の水平線上に佐渡がぼんやりと横たわっていていつも風が爽やかだった。日が傾く頃、弥彦山の下の間瀬の浜に打ち寄せていた美しい波の事だけがはっきりと思い出せる。僕が波に何か特別な思いを抱いたのはその時が初めてだった。まさか大人になって波と関わりを持つようになるとは思ってもいなかったが、30年以上も前の事になるだろうかオアフ島のサンセットビーチを見下ろす事の出来る丘の上から押し寄せる波のラインナップを眺めていて、ふと、幼い頃に弥彦山のつべんで感じた幼いなりに水平線の向こうに思いを馳せた事と目の前の風景が重なったのだ。

それは美しい風景だった。波のラインは10本以上は見えただろうか。波頭から舞い上がるオレンジ色に染まるしぶきはまるで俊馬のたてがみのようなだった。ハワイでのそんな波との出会いは衝撃的だった僕にとってとてもラッキーだったように思う。仕事として向き合い、挑戦すべき素晴らしい対象を手に入れたのである。

そして波は僕のエネルギーを果てしなく吸い上げましたが学ぶ事がとても多

かった。素晴らしい教師でもあったのだ。東京の生活に疲れていても、仕事がうまく行かなくても、ファインダーの中の波を眺めてさえいれば少なくともその間は自分の人生を自分の手に取り戻す事ができた。

あるとき、パイプラインの大きくもなく、小さくもない美しく整った波が規則正しいラインナップを描きながらやって来ているのを見て、僕は意を決して、やってくる波をかいくぐって沖へ出た。

今にも崩れそうなうねりが頭上を通りすぎる度に波の飛沫が雨のように降り注ぎ、黒々と横たわるノースショアの山並みを虹が七色に染め上げる。僕は波間に漂いながら、青く澄んだ空と白い雲を眺めた。そのときのゆりかごの中に納まって空を見上げているような満たされた気持ちは忘れられないものだ。夜明けのノースショアから眺める波も素敵だった。薄紫色の空に弱々しく光る月や肌をかすめる微風、そしてサーフブレイクが完璧に調和のとれた1つの自然の姿を見せてくれる。まさに神の存在すら感じさせる風景である。

1978年、出入りしていたサーフマガジン社から海外取材のオファーがあった。サウスアフリカのイーストロンドン、ダーバンで行なわれるサーフィンコンテストとサーファー憧れの波がやって来るジェフリーズベイの取材だ。

当時、サウスアフリカと言えば人種隔離政策で有色人種は非人間的な扱いしか受けてなかった時代である。有色人種である僕の旅もいろいろ苦勞の連続だった

が、こと波に関しては白人達と同等の舞台に立てたのだ。なぜならサウスアフリカではサーフィンが国技として見られていたのである。

だが実際目にした人種差別というものは想像を絶するものだった。あらゆるものが白人と非白人に分けられていた。大会の観戦も黒人は認められなかったのだ。だが波に向ける思いは白人も有色人種もなかった。全ての人が波の虜だった。波を眺める事ができる展望所がいたる所にあった。サーフィンとは関係のない普通の人達が波を見に来るのである。

しかし日本からは南アフリカまでは気が狂うほどの時間を要した。まず南回りで20時間ほどかけてロンドンまで行き、ロンドンから8時間かけてナイロビへ、ナイロビからヨハネスブルクまで8時間ほどかかる長旅だった。ヨハネスブルクではホテルにチェックインすると同時にベッドに倒れ込んだものだ。イーストロンドンの指定されたホテルで日本から先乗りしていた小林正明、善家誠プロと合流した。他に世界中からプロが集まっていた。ブラジルやイギリスのサーファーもいる。ここで数日間ガンストンプロコンテストを戦うのだ。

大会も半ばを過ぎるとホテルからサーファーの姿がみるみる少なくなっていく。予選落ちしたサーファーは足早に次の目的地へ向けてホテルを去っていく。世界で最も美しい波がやってくる場所、人々に「波の故郷」と呼ばれていたジェフリーズベイで波に乗るために。ちょうどバリ島の波が注目され始めた頃だった

が誰もが一度はそこでのサーフィンを夢見ていた時代だ。僕も小林、善家の両君とともに快適な道路をジェフリーズベイへと車を飛ばした。

ジェフリーズベイにやって来る波はハワイの荒々しい波とは少し趣が違った。静かに忍び込むようにやってくる。ブレイクはまるで機械のように正確で、丘の上の僕の正面で素晴らしいチューブを見せて果てしなく湾の奥まで続く。ロングライドを楽しんだサーファーが疲れ果てた足取りで帰ってくる。ブルアウトが気配でしか確認出来ないほど遠くまで乗ってしまったのだ。なんという美しい波なのだろうか。水平線上は雲1つなく澄み渡って、海は穏やかにみえる。しかし、この波の生まれた場所は南極大陸近くの南緯40度～50度のいつも強風で荒れ狂っている「吠える40度」と呼ばれる海域である。

朝早く同じ場所で三脚を据えながら見た風景は荘厳だった。太陽が顔をのぞかせる前の数分間のドラマは何と表現したらいいのだろう。赤い空を反映した海面に筆で描いたような波の筋が何本も見える。駆けつけたサーファー達も息をのんで波を見つめている。目をこらすと数頭のイルカが露払いのように波乗りを楽しんでいるのだ。永遠とも思われる時間、僕は立ち尽くして腹の下から突き上げるような波の音を聴きながら寒さと感動で震えていた。やがて太陽が顔をのぞかせるとイルカが姿を消し、次々とサーファーが入っていく。沖で鯨の噴く潮が朝日で染まって見えた。海と大陸の狭間で見た素晴らしいドラマだった。📍

この波はいったいどこからきたのだろう……。

波を追い求める写真家の手記

日本のサーフィン黎明期から活躍する写真家、佐藤秀明。サーフィнкаメラマンのハイオニアが、“波”を追い求める、理由は何だろうか？

There are photographers still going that began at "Japan's surfing dawn". One of those pioneer surf photographers is Hideaki Sato. What drives him to pursue the waves?

佐藤秀明◎写真

Text & Photo: Hideaki Sato

WAVE 01
In the beginning there were waves...

さとう・ひであき

写真家。1943年生まれ。ニューヨークに在住後、'70年代前半よりハワイに滞在しサーフィン雑誌を中心に活躍。その後、サーフィンという枠を超え、北極、アラスカ、チベットと世界を旅をしながら、波を撮り続ける